

令和3年度 学力向上プラン

学校名 中央区立佃島小学校

学校の教育目標

- ・健康で 明るい子ども
- ・礼儀正しく 思いやりのある子ども
- ・よく考え すすんでものごとに取り組む子ども

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

- 基本的な学習習慣及び生活習慣を確立する自律力
- 他者を尊重し、自分の意見や考えを伝えることができる表現力
- 知識・技能を活用し課題の発見と解決に取り組もうとする力

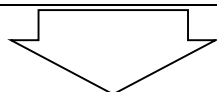
令和2年度「学習力サポートテスト」や令和2年度学力向上プランの検証結果等の分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・第5学年に担当されている漢字の読みについての正答率が約95%だが、書きについては約62%と開きがみられる。 ・文章の中で、文脈に沿った漢字を適切にしようすることが苦手な傾向がある。 ・説明文において、叙述を基に文章内容を捉え、文章を読み解くことに課題がみられる。 ・説明文について、情報と情報との関係について理解し、文章全体の構成を捉えることに課題がみられる。 ・提示された条件で文章を書くことに苦手意識を感じる児童がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習した漢字の知識が定着するまでの反復練習が不足している。 ・ある程度の長さの自分の意見や考え、感想を書く経験の不足がしている。 ・叙述からの読み取りや情報と情報を繋ぐ語句、定義や例示、因果関係を表す文章構造などの知識や読解技術の習得への意識が少ない。 ・自分の考えや意見の中心となるものを明確にすることや、読み手を意識した文章表現や文字制限などの条件に合わせて文章を書く経験が少ない。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・図形の面積を求めることはできるが、示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述することに課題がある。 ・与えられた情報を読み取り、基準量と割合から求めた比較量を比べ、事象の説明の根拠として説明することが課題。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図形を求める公式を活用し課題に取り組むことが多いが、その公式が表す意味について表現する機会が少ない。 ・「基準量」や「比較量」が表す意味の理解やそれらを数直線に表し活用して課題への知識、技能が定着していない。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から情報を読み取ることは得意だが、資料と資料を関連付けたり、情報元となる適切な資料を選択したりすることが苦手である。 ・資料をもとに、理由を考察したり表現したりすることが苦手である。 ・主要国の位置や日本の領土についての知識に曖昧さが見られる。 ・日本の主な地形や気候的な特徴などの知識に曖昧さが見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の資料を関連付けたり、複数の資料から必要なものを選んだりする活動が必要である。 ・資料から読み取った事柄だけでなく、そこから考えられることを言葉にして表現する体験が不足している。 ・日本の国土や世界の様子を知るために、地図帳を活用する機会が少ない。 ・地球儀や地図帳を活用し、緯度や地形の特徴を確認しながら気候の特徴を考え
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・全体の正答率が区平均を下回り、理科を苦手とする児童が多く見られる。 ・天気の変化では、雲の動きから天気の変化を予測したり、雨情報と関連付けて考えたりすることに課題が見られる。 ・植物と発芽と成長では、仮説を確かめるために対照実験と結果を構想することが苦手。 ・植物の花のつくりと実の単元では、ヘチマの花のつくりについての基本的な知識が不足している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各単元、領域において必要な理科的な用語をおさえ、その用語を用いて説明させる場の設定やその知識の定着を確認する時間の設定が必要。 ・どのような条件を変化させ、どのような条件を一定にするかなど、仮説と照らし合わせて実験を構想するために必要な知識、技能が不足している。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な事柄について簡単な語彙や基本的な表現を使い、コミュニケーションを図ることが苦手な児童もいる。 ・外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解に興味をもてない児童もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語と日本語の発音の相違が積極的にコミュニケーションをとろうとする態度を少なくしている。 ・言語やその背景にある文化について興味が乏しい。

<p>体育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・運動技能に個人差がある。 ・課題をもち、その解決方法を考えることについて、児童によって差が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動経験の差が運動技能の差につながっている。 ・授業内で、話し合い活動や、課題発見、解決をする授業展開を構成することが少ない。
-----------	--	---

<p>学力向上に向けた視点</p>	<p>年度末までの目標及び指標</p>
<p>①学力基盤</p>	<p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習規律を意識して児童が活動し、集中して学習に取り組める環境を整えていく。 ・基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図る。 ・朝学習における漢字・計算練習の積み重ねや放課後や夏季休業中の補習学習により、基礎学力を高めるようにする。 <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校全体で統一した学習規律を定める。 ・学校評価児童アンケート「学習規律・生活の約束」の項目において肯定的評価95%以上を目指す。 ・東京ベーシック・ドリル診断テスト（算数）において達成率85%以上、漢字検定において合格率90%以上を目指す。
<p>②授業改善</p>	<p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中央区学習スタンダードを取り入れた授業の計画、実行、評価、改善を定期的に行う。 ・個別に支援が必要な児童に適した授業改善を行う。 ・ICT機器を活用した授業展開をしていく。 <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力向上委員会（仮称）を立ち上げ、計画的かつ定期的な授業改善を行っていく。 ・学校評価児童アンケート「授業内容」に関する項目において、肯定的評価が95%以上を目指す。 ・ICT委員会を中心に計画的に研修を実施し、教員のICT機器の活用力の向上を図る。
<p>③教員の指導力</p>	<p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が1単位時間の中でどのような力を身に付けることができたかを実感できる授業を行う。 ・教員相互の授業観察を実施し、授業力を向上させていく。 ・全教職員がICT機器を活用した授業を行えるようにする。 <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価保護者アンケート「学習内容」に関する項目において、肯定的評価が90%以上を目指す。
<p>④家庭との連携</p>	<p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校や学年の方針、取組等を保護者に伝え、協力体制を作る。 ・ICT機器を活用し、家庭とのコミュニケーションの充実を図る。 <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価保護者アンケート「保護者との連携」の項目において肯定的評価が90%以上を目指す。
<p>⑤体力向上</p>	<p>【目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら進んで体を動かし、運動に親しむことができるような取組を行う。 ・他者の動きのよさを感じ、実践することで、運動への楽しさを実感できるようにする。

	<p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価児童アンケート「体力向上」の項目において、肯定的評価が80%以上を目指す。
--	---



【目標達成のための具体的な取組内容】

①学力基盤	
取組Ⅰ	タブレット機器を使用し、練習問題を繰り返すだけでなく、動画などを活用し、各教科単元の学習内容が具体的に理解できるようしていく。
取組Ⅱ	授業中での言葉遣い、自分の考えや意見を他者に分かりやすく伝える話し方を、児童の発達段階、学年・学級の実態に合わせて提示していく。
取組Ⅲ	各教科で身に付けた知識・技能を活用し、他者との交流を図る場を意図的かつ計画的に設定し、児童の考えが広がり、深まるようにする。

②授業改善	
取組Ⅰ	学習指導要領で示された各教科の目標の3つの観点を捉え、各教科の見方・考え方を取り入れた授業を展開するために、指導書や様々な実例を参考に教材研究を行い、児童の実態に合った授業を提供していく。
取組Ⅱ	児童が1単位時間に見通しをもって取り組めるように、単元のめあての具体的な設定、評価を行う場の設定、児童の習熟度を確認にする振り返りの時間の確保など、ICT機器を取り入れた授業デザインを行っていく。
取組Ⅲ	学習指導要領で整理された「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質のバランスのよい育成を目指し、教科横断的な視点での授業構成を行っていく。

③教員の指導力	
取組Ⅰ	年間を見通した教育計画や教科指導計画の適切な実施を学年間で共有し、かつ年間を通したカリキュラムデザインを図り、授業計画を立て、実行していく。
取組Ⅱ	OJTの実施し、教員相互の授業観察の機会を場を計画的に設け、教員の指導力の向上につなげていく。また、教員1人1人が授業構成の視点や児童への声掛けなどの授業への知見を深めていく。
取組Ⅲ	ICT研修を計画的に行い、授業でのICT機器の活用が全教職員で行えるようにしていく。ICT機器を活用した授業作りを目指し、ICT機器を活用した研究授業を行っていく。

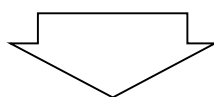
④家庭との連携

取組Ⅰ	本校の教育活動への保護者の理解を深めていくために、ホームページを活用し、積極的に情報発信をしていく。
取組Ⅱ	保護者が安心して児童を登校させることができるように、学校便りや学年便り、または連絡帳を通して学級の様子を具体的に伝える。また、ICT機器を活用した保護者との連携を行っていけるように、実践事例を増えしていく。
取組Ⅲ	低・中・高学年と各段階の実態に合わせて家庭学習が行えるように、保護者への理解を求め、宿題を毎日出していく。学年便りや保護者会等を活用し、家庭学習の方法や考え方などを保護者へ伝え、協力を依頼する。ICT機器を活用した宿題の出し方についての実践事例を増やし、ICT機器の活用の充実を図っていく。

⑤体力向上

取組Ⅰ	中休みは校庭や体育館で遊ぶよう指導し、体を動かす時間、機会を確保する。また、月一回程度のたてわり班活動では、全学年が企画した大縄チャレンジや様々な遊びに取り組む。
取組Ⅱ	各運動領域に必要とされる動きを相互に観察し、教え合う場を意識的に設定し、友達と運動することのよさを実感できる授業を行う。
取組Ⅲ	3月に行われる「マラソン大会」を目標に、全学年、体育や体育朝会で時間走に取り組む。また、高学年では、講師を招き「走り方教室」を開催し、走ることへの興味・関心をさらに高める。

【取組結果の検証】



学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤	<p>児童に行ったアンケートの「学校の約束を守っていますか」についての項目で肯定的評価が90%と、学力基盤となる学習規律が身に付いている。ICT 機器を活用した授業を展開することで、興味や関心をもって授業に取り組む児童が増えた。「真剣に先生や友達の話聞き、学習に取り組んでいますか。」の肯定的評価が95%と高く、児童の授業への前向きな姿勢がうかがわれる。</p>	<p>各教科において ICT 機器を取り入れた授業を積極的に取り入れることで、主体的・対話的で深い学びの授業につながった。一方、「お子様は、自分の考えを書いたり、発表したりと表現していますか。」の保護者の肯定的な評価は79%だった。授業内における ICT 機器の活用とノートの活用のバランスを考え、児童が自分の考えを書く力を育てていきたい。</p>
②授業改善	<p>1単位時間の授業のめあてを具体的に設定し、授業の振り返りを継続的に行うことで、児童が安心して授業に取り組むことができた。児童アンケートの「授業の内容がよく分かる」という項目で、肯定的評価が95%と高い結果があった。さらに、4・5・6年生の学習力サポートテストの正答率は、国語・算数・社会科で全国平均を超えた。</p>	<p>児童の学習への意欲の高まりや表現力、思考力を促すため、全教員が ICT 機器の操作を学び、授業での ICT 活用に差が開かないようにするために、今年度も ICT 機器の活用等について研究を進めていく。4・5・6年生の学習力サポートテストの結果から理科への学習理解の課題が見られる。理科の授業改善だけでなく、ドリルパーク等を活用し、理科の学習理解改善に努めていきたい。</p>
③教員の指導力	<p>年間を通して計画的に OJT 研修を行った。主任教諭以上が若手教員に研修を行うことで、若手教員の育成につながった。「学校は学習内容が分かりやすく楽しい授業をしている」という項目の保護者の肯定的評価が89%であった。校内全体で ICT 機器の活用について次年度も研修を行い、教員一人ひとりの ICT 機器の活用の技術の向上につなげていきたい。「分かりやすい授業を目指していますか。」という項目の教員の肯定的評価は96%であった。</p>	<p>OJT の実施は、教員間のコミュニケーションの促進に繋がった。教員に対して行ったアンケートで、「分かりやすい授業を目指していますか。」の項目の肯定的な評価は96%だった。今後は、低・中・高の学習の系統性を理解した上で、教科横断的に授業をデザインできるカリキュラム・マネジメント力が必要である。次年度も目的をもって OJT の計画的な実施を行っていく。</p>
④家庭との連携	<p>本校の教育活動や学校の様子、また、種々のアンケートや学校評価等を Class Room や Google フォームを活用し、学校と家庭とのコミュニケーションの充実を図った。「学校は保護者に出す文章や連絡帳等は、わかりやすく内容も適切である。」の保護者の肯定的な評価は84%であった。ドリルパークを活用した家庭学習に取り組ませることで、担任が児童一人ひとりの学習状況を把握、管理が可能になった。</p>	<p>ICT 機器を活用した情報発信の充実は図れたが、HP を活用した情報発信には課題が見られる。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、保護者が学校へ来校する機会が減っている。ICT 機器と HP の両方を活用して学校の様子を情報発信することは、今後もより一層重要となる。一方、ICT 機器の活用の充実に伴い、児童の情報モラルがより重要になる。学校と家庭で連携し、情報モラル教育の充実を図っていきたい。</p>
⑤体力向上	<p>新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮し、体育の授業や20分休みを中心に児童の体力向上へ努めた。体育の授業では、ICT 機器を活用し、自分の動きを動画で確認し、課題に対して向上心をもって取り組む児童が増えた。児童へのアンケートでは、「体を使って遊んだり、スポーツをしたりしていますか。」の項目の肯定的な評価は84%だった。</p>	<p>3密を避けるために、20分休みを学年別に校庭・体育館を利用させた結果、室内で遊ぶ児童が増えた。児童に行ったアンケートの「自分の体力づくりに取り組んでいますか。」という項目の肯定的な評価は、78%と80%を下回った。新しい日常下での児童が体力づくりを行える環境の整備を、本校の実態に合わせて行っていく。</p>